

### Ⅲ フリーディスカッション

#### 川幡

それでは第3部のフリーディスカッションに入ってまいりたいと思います。長くおつき合いいただきまして、ありがとうございます。皆さんの休みの日にわざわざ来ていただくというのは、もの好きとは言わないですが、まちづくりが好きな方が集まっていたいているのかなと思います。

本来ですと、会場からまず質問をお受けするのですが、最初に口火を切ってもらうのはちょっと勇気がいるかなと思いますので、まず私の方からいくつか、それぞれの先生にご質問をさせていただいて、そのあと会場の方に振ってまいりたいと思います。

それでは高橋さん。ちょっとうがった言い方をしますと、飯田の人たちは飯田の覚え書き、規範のようなものを作られて、ある意味公共性の高い人がすごく多いのかなと。一方、大阪市では、人の移動が激しく、コミュニティがくずれているといいますが、あまり地域のコミュニティを重視しない人が集まっているところで、飯田のような帰阪がつくれないのかなと思ったりします。大阪市内でもできるためには、どういうところをポイントで考えればいいのか。すごく難しい質問ですが、ちょっとお答えいただければと思います。

#### 高橋

私は公務員ですから、少なくとも公務員という仕事の仕方として、再開発を卒業したときにある住民の方が言ってくれたことがあります。「高橋さんは受け手の公務員だな」と言われたんですよ。

どういうことかといいますと、公務員というのは基本的に送り手なんですよ。「前例があります、法律があります」と言って仕事をやるのが、公務員なんです。

私が基本的に違ったことは、常に相手のおっしゃっていることを聞いて、聞くとエゴも入ってきてしまうんです。その中の大事な部分（普遍的な部分）を構造化して、そこは対応しようとする。

「あなたのおっしゃっていることは客観的に見るとこういうことですね」ということに置き換えができることがすごく大事なことで、実は公務員は本来そうでなくてはいけないと思っているわけです。送り側の仕事の仕方がほとんどなんですよ。前例や法律に縛られて。しかし私は法律を乗り越えて新しい運用を引き出していこうというふうに考える。

そういうような意味を考えてみますと、私は別に飯田の状況が特別だったわけでもないと考えています。今、私は高野山にきていますが、高野山というのは大まかにいって、僧侶と在家で構成されています。在家の会議に僧侶の方が1人でも入ってくると、誰も話さない。在家は仕事をいただいているから話せないんです。そういう中でどういうふ

うに新しいコミュニティを作るのか。僧侶と在家という差を越えた新しいコミュニティのやり方があると思って、今、取り組んでいる最中です。

そういう意味で、流動層が集まっているところだから無理というのはもういいわけでは、どこにでもそこにあったやり方がありそれを探るべきです。例えば、いま子どもの問題で一番有名なのは千葉県の秋津コミュニティですが、新しい住宅地のコミュニティでの取り組みですね。なので、どの地であっても可能性はあると思っています。

川幡

ありがとうございます。公務員のことはちょっと、私たちも襟を正す思いで頑張らねばと思って聞いていました。そして、どこでもその状況に応じて「可能性」はあるということでした。

さて、次に笹井さんは、自転車にかかわる市民活動団体として、実際の都市計画コンサルタントとしてもやっていたらっしゃる。市民活動の方で、市民とマップづくりをされた。会員の人と一般参加者がマップづくりをされたということですが、それをすることによって、参加者の意識が変わったというふうに思った部分というのはありますか。

笹井

はい、実際にワークショップの場では、参加者が驚かれたり、関心されたりという場面をいっぱい目にするんですね。

実際に自転車で走りながら、マップのための調査をするんですが、その際に自転車ルールを説明するんですね。「実際こういうところを走るんですよ」「こういうときこうしたらだめなんだよ」と。すると参観者は知らなかった「へえー」「実はそうだったんですか」ということを聞きます。それが参加者の心に残ると、今度から守ってもらっているのではと。少なくとも自転車に乗る場面で、まず知らなければいけないことを知るという部分のハードルを1つ越えたわけですね。そしてその参加者がまた誰かに口で伝えていっていただけたらいいなと考えています。

事故多発地域や危険な場所という部分を知る、あるいはマップ上で認識するということは、普段は漫然と走っているのですが、そういうものを見ながら、気にしながら走りますと、危険を想像する力のような部分が、その場、その場でだんだん皆さんに芽生えてきます。それは日常行動でより安全性が高まっていく方向に変わっていきます。

また、まちのおもしろいこと、美しいところ、そういった小さな発見があります。調査をしている中で皆さんの目が輝いたり、へえーっと驚く瞬間というのを目の当たりにしますので、それでやはり変わっていつてもらっているのかなと感じています。

川幡

実は今、天王寺区で笹井さんは、子どもたちと一緒に天王寺区で自転車のマップを作

っていらっしやいます。本当に今まさにおっしゃったとおり、調査をしたり、話し合っている中で子どもの顔が生き生きしてきたり、他の子たちの意見を聞くことで、「そうやね」というふうに言ったり。あるいはマップに情報をのせるときに、人に伝えるためにはどういう伝え方をしたらいいのかというふうに、日ごろ全然思い描いていなかったことをもう少し深く考える場面がどんどん出てきます。マップができあがると嬉しいのですが、そのプロセスというのもすごく大事なかなというのは感じますね。

次に松富さんですが、最後にすごく思わせぶりといえますか、これからの想いを語っていただいていたのですが、空堀は HOPE 事業で街並み修景をやってきたのだけれども、課題がまだあって、次のステージに進まないといけないとおっしゃっていたのですが、それは具体的にどんなことだということですか。

松富

早くも核心の部分で、どうもありがとうございます（笑）。

そうですね、HOPE 事業が始まる前、行政に対する見方であるとか、これから助成によって地域が変わっていくんだというときの、地域の人々の気持ちですね。その高まりというのが非常に上がっていくのがよくわかったんですね。逆に、その中では、事業が進む中で起こってくる本当の課題というものが、よく見えてこなかったということだと思っんです。

今その事業が一定成果を出しながら進んできたわけですが、地域の中ではひょっとして問題の解決に至っていないのではないかという気持ちが、ちょっと芽生えつつあるというのが今の状況なんですね。それでは問題というのは一体何だったのか。

それは、1 つは木造密集地域の抱える問題。今日高橋先生、笹井さんの話共通で、道路の問題が出てきました。道路問題は木造密集地域にとっても大きな問題なわけですね。特に私は路地のお話をさせていただきましたが、路地というのは、路地に面している建物は建て替えができないわけです。つまり路地は法律で道路だというふうに認められていないので、そこは建物を建ててはだめですよというように法律で規定されているわけです。

その部分の建て替えができない。あるいは場合によりますが改修もできないというようなことになることは、その問題をクリアしないと、地域の課題は解決していかないのではないかということが、少しずつ浮き彫りになってきたということだと思っんです。

ということで次のステップといえますのは、まさしくその課題とどう向き合っていくのかというものではないかというふうに考えています。

## 川幡

難しい問題ですね。大阪市内というのは木造住宅の密集市街地が多くて、解決しないといけないことですが、難しい問題です。

高橋先生には再開発のお話を中心にさせていただきました。実は体験農業の話もスライドをたくさんご用意していただいています、本当にそのお話しもすごくおもしろいのですが、今回はその時間がなかったの残念です。ただ1つエキスとして、体験農業の話をさせていただきました。体験農業を通じて地域の人が変わったとか、あるいはそこに参加した子どもたちがどう変わったのか。それが観光ではない体験農業を皆さんに提供する目的の1つだと思いますが、その辺を少しお話しただければと思います。

## 高橋

大阪のまち中の方々にはちょっとわかりにくいかもしれませんが、先ほど体験教育旅行と言いましたが、修学旅行で年間3万人くらいが飯田市に入っています。それは何のために入れてきたのかというのは、観光客を増やすわけではなくて、農業に誇りを持ってやっていただくために入れてきたんです。結果として、1泊すれば実の体験で5,000円入って、宿泊で5,000円入って、翌日の体験で5,000円入れば15,000円。4人泊めると受け入れ者には6万円ぐらいのインカムがあるんです。あるんですが、何を目的にやっていたのかといいますと、あくまで農家に対する誇りをもう一度再生したいと思ったからやっているんです。ですから農政課の職員が担当でやっているわけです。

そうしますと、地域の人というのは本当に変わってきます。私が退職するときに、市街地から40分ほど離れた三穂というところのおじいさんが、朝、私の机の前で座って待っているんです。「おまえ部長か」「はい、高橋です。よろしくお願いします。」「俺は78歳だ。もう農業をやめようと思っていた。今年初めて体験教育旅行というのを受け入れてみて、農業を続ける気持ちになったぞ」と言うんです。市の方で支所を建て替えたり、前の道路を舗装してくれたことはいいことだけど、そんなことは当たり前だ。農業を続けるような気持ちになったということと、初めて市役所というものが俺たちのものだと思ったと言って、それだけ言っておじいさんは帰っていったんですね。

つまり私たち公務員というのは、同じような目線で見ただけならば、そういう方をどのようにして広げて、仲間になって一緒に仕事をやっていくのかということが、1つの技術ではないかと思っています。

子どもたちは茶髪であればあるほど、効果があります、もう完全に。たった1泊、農家に泊まるんですね。なおかつうちは簡易宿所といって山小屋と同じ許可しか取っていませんから、自分たちで調理して食べるんです。もちろん受け入れ側が手伝ってあげますけれども。食べる時には絶対に話さざるをえないんですよ。そこで出てきたものを前に「おいしい」「すっぱい」「まずい」と言って。それは絶対にコミュニケーションが

得られますので。非常に極端な表現ですが、課題を抱えた子どもさんであればあるほど、1泊しただけで帰りたくないと言って、泣いている現場をたくさん見えています。そういう点で、本物の体験というのは本物の農家にこそあるのだ。観光農園ではないということと言いたかっただけです。

川幡

どうもありがとうございました。  
講師の先生方でそれぞれ質問がありましたら。

高橋

松富さんに。  
1つは建物を改修するときのお金はどうしたのかということが私はわからない。補助金が入ると言ったでしょう。でも残そうとすると、お施主に出させるというのが普通だと私は考えるんですよ。お施主さんは果たして出すかという話と、もう1つはそこにテナントが入ってくれてペイできるというシミュレーションを打つかもしれないじゃないですか。テナントはどうやって見つけてきたのか。この2つです。

松富

ちょっと種の部分は隠しておこうかなと思っていたんですが、原則的には建物を借り受けたときの大家さんの責任としまして、柱、屋根、外壁など主要構造部については大家さん（施主）が責任を持ってなおしてください、というのを原則にしています。

中は僕たちの責任でしますよということですが、ここにミソがありまして、ここにテナントが参加されます。5店の複合店舗であるとか、10数軒だとか申し上げましたが、そのテナントさんが内装をそれぞれ好きなように改修されるわけですね。

つまり大きく言えば、外側については大屋さんがなおす。中については入るテナントさんの費用でなおしてもらうということで、僕らにとってはノーリスクなわけですね。

ノーリスクといいますが、リスクはあるのですが、出資がないというようなきれいな話ではございませんで、それはケースバイケースで、原則はそうになっているのです。しかし、実は大屋さんも「そんな100%も払えないよ」ということはもちろん出てきますので、その場合についてはいくらか出資をしながら改修しまして、テナントが営業開始して、2年あるいは3年でペイするという計算のもとで改修事業を進めているということです。

高橋

テナントさんをどうやって集めているのかということと、テナントさんが入ってくるまでに、工事が終わってから時間がかかるじゃないですか、タイムラグが。その間に作

った業者さんにはお金は入らない。それは誰が、どうやって払うんですか。

テナントが決まってきて、10店舗が一発で決まってからオープンなんてあり得ない。普通だんだん埋まってくるじゃないですか。その間にお金を誰かが立て替えるのか。

松富

最初の企画の段階で10軒の店舗を決めますね。募集します。10軒全部足並みが揃ってからスタートなわけです。お金の見込みがちゃんとしたということで、はじめて工事計画をスタートさせるわけです。

今までよかったのは、そうやって魅力をうたいながら10軒企画すれば10軒集まってくれるということが成り立ちました。そこはひとえに普通のデベロッパー事業ではなくて、市民活動であるがゆえに、魅力をうたいだせたのではないかということだと思います。

川幡

テナントの集め方というのは、地域に貢献するとか、あるいは統一コンセプトを決めて集めていらっしゃるんですか。

松富

そうですね、今3軒施設を紹介しましたが、それぞれコンセプトを持ちまして、ここは物販あるいは飲食が中心な方がいいなとか。ここは物販飲食が中心なのだけれども、商店街が近いのでこういうような方がいいなとか、少し大きなフレームワークだけをして、そこに引っかかるテナントさんに入っていただくというのを1つスタイルにしていますね。

直木十三五記念館が入っている建物ですと、直木三十五記念館を中心にしながらテナントを入れるわけですが、公園の近くで地域の中心にあるということから、地域に貢献できるようなお店を入れるというコンセプトを持って、募集するという展開にしています。

ですから心齋橋や梅田の商業施設とは違って、何でもいいですよということではなくて、少し僕らのまちづくり活動と一緒に、歩調を合わせて進んでいけるテナントさんを募集しています。面談をして、うまくいきそうだなと思ったらお入りいただくという状況で進めています。

川幡

笹井さん、どなたかにご質問ありますか。

笹井

松富さんに質問ですが、実際どうなのかわからないですが、あのあたりでテナントさんというのがうまく回っているのかな(利益をあげているのかな)と。お客さんが来て、それなりのお金を落として、成り立ちますが、人が集まってもお金は落ちないと大変だなと疑問をちょっと抱くことがありまして。その辺の実情を簡単にでも教えていただければと思います。

松富

何年か前に『さおだけ屋はどうして潰れないのか』という新書がヒットしました。実情はテナントさんがどう儲けているのかということには関与していません。わかりません、というのが把握している範囲です。

ただ結果としては居着いていただいている。ずっと家賃を滞りなく支払っていただいているという状況からみて、健全に回っているというふうに理解しています。

もちろん最初に募集して、ずっと空テナントがなく、回っているというのではないですね。やはり入れ替わりがあるわけです。割と若い人、特に30代までの人がお商売したいということで相談を受けたりするわけです。どこかで経験があるというのではなく、あそこで新規事業としてスタートし継続しているテナントさんが少ないですね。

ですから早く退去になってしまうか、ずっと続いているかという、どっちかになっていますね。長くいていただいているテナントさんについては、たくさん儲けていただいているのだろうというふうに理解しております。

川幡

ありがとうございました。

ではそろそろ会場の方から質問を受け付けたいと思います。どうでしょうか。感想でも結構ですが。

会場1

高橋先生にお聞きしたいことがあります。先ほどのお話の中で、2年間に住民の方200人とワークショップや勉強会を繰り返しながらやってきたというお話をお聞きしたのですが、よく2年間続けることができたなということがちょっと驚きです。

あとは年齢層ですね。今はある程度お年を召した方ですと、興味をもって参加すると思いますが、そこに若者も入れていったのかどうかということをちょっとお聞きしたいです。

高橋

先に年齢層からお答えします。駅前中央通り商店街というところの専務クラスを集め

ました。「将来を担うのはあなた方だから、あなた方が考えてください」と言って、彼らが 21 世紀背負子会というのを作って、1 年目の「苦しいときにはニューディール」ということを決めてくれました。

それは中心市街地として投資をする場所はこの区域であって、そしてなおかつそれを限定したわけですね。中心市街地を活性化するとき、ものすごく広いところを中心市街地と言ったまちもありますが、飯田市は限定しました。

2 年目のワークショップのときに増えてくるのですが、2 年目のワークショップのときは、JC の仲間も入れまして、それも公民館を使わずにお寺でやりました。というのはお寺というのは地域のコミュニティの中核でして、そういう意味で場所をお寺に設定して、ずっとやってきました。

ワークショップは、一番最初に日本にアメリカから導入してきたメンバーに全部入ってもらいました。計画技術研究所の林泰義さんが団長になって、日本から 20 人くらいのコンサルタントが行って、アメリカからワークショップという技術を持ち込んできたんですが、その初期のときの方に入ってもらいました。当時もそうでしたし、現在もそうです。

再開発も全部ワークショップでやっていくのですが、完全にスケジュールを提示します。毎月やっていって、こういうふうな階段を上がりますということを全部提示しながら、それでやっていかないと、必ずマンネリになってしまって途中でつぶれてしまうんです。

もうひとつ、ワークショップで合意できる内容とできない内容があるということ。例えば自分の財産を掛けて再開発をやるというようなときに、ワークショップなんていう技術で合意なんかはできないんですよ。それをどうやって合意にもっていくのか。

ワークショップというのを私は何か本に書いた記憶がありますが、いくつも問題点があります。大きな命題と小さな命題が重なったとき、例えばバイパスが空いたときに、地元の住民はそのまま農地を置いておいてほしいと言い、国道のバイパスを作ったということは、国土交通省がそこは開発行為を行うということが前提だとするわけです。そうすると大きな国の命題と個人の命題がぶつかったときにどうするのかという解決は、話し合いの結果で決めるといいうのはあり得ない。

ですからワークショップはうまくいくケースとうまくいかないケースがあります。かつ 1 年間のカリキュラムはスタート時点で提示をして、必ずステップを上げられるようにしたということが基本だと思います。

## 川幡

よろしいですか。地元で日々ワークショップをするときに、住民参加をするときに本当に難しい問題にぶつかります。情報を提示して、ここで何をするというようにやらな

いと、住民の人がどんどん逃げていったり、決まるものも決まっていけないということが出てきますよね。

高橋

ワークショップは問題がありまして、例えばパターンランゲージというものがありますが(形と言葉は変換できるというクリス・アレキサンダーが提唱した合意形成の技術)、彼の技術のようなものを一部使うんですよ。しかしその手法もキリスト教社会の概念で全部縛りがかかっていますので、日本では必ずしもうまくいかないんです。

そういう点で、住民参加と言いながら、住民の人がやったものを形に変えていくというのはかなり高度な技術がいます。基本的には記号論でやっていきました。これ以上言うと難しくなってしまうので、全部記号論に置き換えて、それでなおかつパターンランゲージも使いました。

川幡

他にどうでしょうか。どうぞ。

会場2

ありがとうございます。市内の北区に住んでいるのですが、なぜか富田林の寺内町という古いまちでまちづくりに参加しています。

今日は本当にお三方に教えていただいて、目から鱗でした。今高橋さんにおっしゃっていただいたように、やはり何段階か含めてステップアップしていくということが、私たちまちづくり協議会もいろいろな立場の者が参加していますので必要だなと。昨年協議会が発足しまして、1年目でまだまだなんですが、いろいろな立場の方、地域住民の方、もちろん個人財産を持っている方、土地を持っている方、商業者の方、よそから来られて店だけをそこで持っている方、そしてそこで暮らしている住民の方、それと私のように外から入っているボランティアとか、専門家の方、都市計画の先生の方とか、いろいろな方が入って協議会をしているんですね。

行政は、主導は住民とは言っていますが、やはりサポートというか、誘導と言ったら御幣がありますが、着地点がありますよね。そこへ持っていきたいということもありまして、今結構行政側の着地点と住民が自発的に動いてきたことの道が分かれてしまっています。住民が自発的に動いてきたり、考えてきて、今いい感じなんですね。そのときにちょっと行政を足並みが乱れてきまして、お互いのコミュニケーションが取れない。

そういうときに調整役といいますか、どのようにまとめていくのか。無理だとさっきおっしゃったのですが、うまいこともっていくためには、どういうことを心がけてまとめていかれたのかということをお教えいただければ。

話し合いだけでは進まない部分がありまして、自分の財産を掛けてということになり

ますと、やはりすごく個人的なことになりますので、外側の者はなかなか言いにくくなっている状態です。行政の方に助けていただきたい部分もあるのですが、なかなか。

川幡

住民の思いと行政の方の立場の微妙な違いみたいなものをどう軌道修正しながら、そのまちを救っていくのかということですね。

高橋

いくつか参考になれば。

まず再開発の権利者 38 名がいるところでやったのですが、議員さんや町内会長さんは特に平らな立場でやったこと。絶対に役員にしなかったんです。すべて平ら。ですから議員が出てこようが、出てきても平らにやったということ。

それから人数にこだわらなかった。要するに住民同士がどうやって考え方を広げていくのかということを中心にしましたので、人数はどうでもいいんですよ。

コンサルタントは東京から来てもらいましたが、ある会合で誰も集まらないという現場にぶつかったことがあるんですよ。それはなぜかといいますと、町内のお祭りの日を私が知らずに、その日にぶつかってしまったんです。ですから、いかに僕がそれを知らなかったかという話なんです。「高橋さん、そんなむりはいかん」とすぐにやられてしまう。それが勉強なんですよ、僕らの。

つまり住民は役所とうまくいかなかったら、役所に妥協しないことです。役所の職員というのは権限とお金を渡して、責任を取るのが基本なんですから。

りんご並木だってそうですよ。りんご並木は 200 人でやりましたけれども、そこで決めたことについては、実現します。ただしエゴはだめですよという物差しはきちっと持っていますよ。でも役所と住民が対立するような案件が出てくれば、住民を優先するんです。それは行政マンの基本ですよ。それをみんなそう思っていないんです。自分が偉いと思っている。もっと言ってしまうと、公務員の本質の問題なんです。

この間川幡さんに質問されて、私は答えたことがあるんですが、例えば役所に行くと、「私はこの係ですから、このことしか知りません」と答えますよね。普通公務員は答えるんですよ。こういう方は公務員としては辞めてくれと高野町では言っているんですよ。公務員とはみんな知っていて、たまたま今福祉の仕事を担当しているだけなんですよ。勘違いしているんですよ。自分は役所に入ってから税務課と福祉課しか行っていませんから、そこしか知りませんという者はいないんです。そういう職員は。

深くは知る必要はありませんよ、でも少なくとも全体としてどういうことがあるのかを知ってやるのが公務員というものなんです。公務員にはその間違っているのがものすごくありまして、私も高野町に行って現実に困っているんですよ。飯田市では全体の話をしてさっと進んだので同じように話しますと、全く通じないわけです。そこら辺

のところまで含めて考えたときに、大事なことは住民と役所に差が出てきたときには、基本的には私は住民側をとって仕事をやってきました。それで正解だったと思っています。

それからもう1つ思ったことは、私は富田林の寺内町に何回も行っているんですね。私は高野町に来て、高野町のまちはここを目指したいと言ってるわけです。私が勝手に言ってしまうわけです。高野町の前近代性が近代を超越するから、30年かけて、50年かけて高野町をもとに戻してくださいと言っているんです。

私が寺内町へ何度も行って感じて感じることの基本は、高野町と同一性があるのではないかと。そんなことを思いながら、いつも楽しみながら見ていますから、頑張ってください。

川幡

他に。どうぞ。

### 会場3

私は純粋の大阪人で、大阪市民の立場から少し3人の方に、簡単にご質問と感想を述べたいと思います。

高橋さんのお話はかなり同感できる場所があったわけですが、住民参加という言葉がお話の中にはなかったです。意識的にされなかったのか。あるいは全体の中でやっていることでそのことをおしゃっているのか、この辺は少し伺っておきたいと思います。

ただ、よく住民参加のまちづくりというスローガンが出るわけですが、住民サイドから考えますと、住民参加とはそもそも何なのか。このことがよくわからないままに、住民参加が走り出している。私の経験では、やはり住民参加の前に民主主義だと思います。住民民主主義をはっきりしないと、この点は理解もしがたいし、難しい。

ときどきいろいろなところでお話をする機会がありますから申し上げますと、まちづくりというのは誰しもが少しずつ損することだと。そうすると必ず何か生まれる。こういう立場をずっと持っているわけです。誰かが得するようなまちづくりというのはあり得ない。このように実は私自身は思っております。

そういう点でもゼネコンは入れないとか、ゼネコンは入れなかったとかいうお話もありましたが、共通していることは、上尾市、飯田市、東京の池袋、その3つの話を聞いてはっきりしたのは、行政の役割というのは何なのかということ、きっちり住民の中で論議をするということが非常に大事ではなかったのか。こういうことを感じましたので、ひとつコメントをいただきたいなと思います。

それから2つ目の笹井さんですが、自転車というのは僕も好きでして、大阪もほとんどくまなく自転車で走るということをやっています。今日もここへ自転車でやって来ましたから、そういう点ではよくわかるのですが、交通災害に対して、これは自己責任も

あるわけですが、必ずしもこの大阪のまちではちょっと言えない面があるのではないかと。

そういう点で、自転車ロードを作ろうというような運動が市民運動の中でどういう面まで拡がっているのかなということをお伺いしたい。

それから松富さんには、空堀のまちも何度もあるいて知っていますけれども、一番私が気になったのは何かと言いますと防災問題。これと今後解決しようとしている問題とどのようにつながっていくのかなと。避難道路とかそういうものはわかります。しかしいったん火災が起こったときに、どのような態勢があこのまちの中にあるのか。

それからもう1つは、地上げ屋がやって来て、権利関係者あるいは地域住民の所有者が地上げ屋のやり口に怒りを持つのならいいけれども、迎合して土地を売ってしまうとかいうことで、思わず街並みの修景整備と相反するような、そういう建築計画が起こったときにどのように住民として、地域でどうやるのかということを考えておられるのか、この点も伺いたいと思います。

## 高橋

集中砲火を受けております高橋です。

いろいろなことを言うとバチが当たるということでして。住民参加という言葉はあまり使わないですね、私は。というのは、要するに先ほども言いましたように基本的に「私」でありながら、「公」ということを話せる人というのは誰かといいますと、実は住民の中に必ずいます。そういう人でないと中核にはなれないんですね。そういう人に、ある意味で言いますと、その人を中心としたグループにある程度権限と予算を渡します。ですからりんご並木を整理したときには約8億かかりましたが、責任を持って整備します。りんご並木は、高橋は計画をやっただけで、実現できないだろうと誰もが思っていたんです。でも200人の人が2年間かかってやったということはやれるわけです。

ですから実はあれをやるためには、交通計画がないとできない作業ですから、そういうものを全部抱き合わせにしてやっていきました。

そのときに行政の役割というのは、いつも思っていることは、自治の原点は村寄り合いにあるということです。自治の原点は村寄り合いにありというのは、お時間がございましたら皆さん、民俗学者の宮本常一の『忘れられた日本人』の冒頭を読んで下さい。「津島にて」という箇所、津島で宮本常一が古い文書を借りなければならぬときに、一日たってもちっとも借りられなかったという文章が出てきます。幾日かたって全員ご同意して借りられることになったと。要するに村の構造というのは、1つの問題を論議して全員同意するまでものごとを解決しなかったんです。

自治というのはそういう形で運営されてきて、明治4年の合併で大きくなってしまったことによって、2日も3日もかけてものごとを決めたり、人数が大きくなったので1カ所にまとまることができなくなったことになった。そして明治近代の中でこの地域はどういうふうにしていったらいいのかというのを決める議員が生まれて、そしてそのこ

とをきちっとやる職員というものを採用したわけですから。

したがって私たちは議員さんが決めたことをきちっとやるのだということを基本的に忘れないようにしないと、間違いが起きる。言いたかったことは、自治の原型は村寄り合いあるのだということ。つまり自分たちが決めて、自分たちで福祉はやっていたのだというところまで常に立ち帰った意識がないといけないと思っていますので、住民参加という言葉は私はあまり使いません。

まちづくりは、生き生きとした生活する場を共同して作るにあたって、知恵や労力やお金をお互いが出し合うことだというふうに、私は思っています。したがって行政はそれを支援するだけです。そういうことができやすい状況を作るために一生懸命やります。

ですから再開発の話も最終的に議会に出たときに、こんなことを言っては怒られてしまいますが、もしもこの再開発ができなければ誰が責任を持つのかと議員さんが質問したときに、市長がなんとなくあいつだというような感じで話したものですから、議員が全員私の方を見ましたけれども、そのくらい再開発というのはやばい話です。

政治生命を切るくらいの話ですが、そのときに地元へ行ってお願いしたということは絶対にやりましょうよと。よくまちづくりは住民と行政が両輪だと言いますが、私は言ったことがありません。あれはやったことのない者が言うことだと言っています。行政と住民は実は一輪車なんですよ。こけるときは一緒にこけるんですよ。

なぜわかるのかといいますと、再開発で第1号の建物ができあがったときに、どうしても市の単独予算が12億いったんですよ。それは2階と3階に福祉事務所を引っ張ってこないといけないために12億というお金が必要でした。しかしに、飯田市の予算では12億は出せなかったんです。難しかった。

そのときにどういうことが起きたのかといいますと、再開発の組合長が中心市街地から誰も市議員がいなかったものですから、俺が市議員になると言って立ちました。そして67歳のスーパーの会長（1階に入った）が、俺がそれじゃあ中心市街地の組合長を受けるとい話が出てくるわけです。

つまりそのくらいお互いの関係が密でないと、高橋がいくら産業経済部長で頑張っても、12億のお金なんかは職員だけでは引っ張ってこれない。俺が議員になって議会をまとめるという、そういうことがお互いにできない限り、とてもじゃないですが、本当に地域が動くかといいますと、動きづらいというふうに思っています。お答えとずれていたら申し訳ございませんが、感想だけ言わせてください。

川幡

続きまして笹井さんに、自転車ロードに市民としてのムーブメントがあるのかどうかという質問だったと思いますが。

笹井

自転車道を作ろうという動きですが、大阪市内では多分あまり聞こえてきていないと思います。自転車愛好家の中には自転車道を造ってほしいと言う人はいるのですが、自転車に乗る多くの方がママチャリや、それに近い自転車で普通に生活されている方。この方々は自転車は歩道を走るものだと想って走っているので、あえて自転車道がどうこうという発想がないといえますか、意識がないわけです。

ですから、やはりなかなか自転車道を造ろうという動きは弱いのが実情です。これは他の自治体でもそういうことをよく聞きます。

今日、私は「おおさか自転車マップづくりの会」としてお話ししていますが、「自転車文化タウンづくりの会」でも活動しています。そこでは自転車道をもっとちゃんと整備する、整備だけではなくて、自転車が安全に走ることのできるネットワークを作っていくようにしています。例えば大きなイベントでPRをするとか、何かそんなことをしようとはしているところですが、市内全体としてはまだ弱いですので、ぜひそれは広げていきたいとは思っています。

松富

今日は非常に難しいご質問をいただきましたが、まさに次のステップで考えていけないといけないというところの問題点でございます。防災と地上げの問題でございますが、これは活動しているグループ、あるいはその地域が考えていることではございませんで、私個人の見解でお答えをさせていただきたいと思えます。

まず防災についてですが、この地域ではこの間大火がなかったわけですね。大火がなかったのはなぜかということ、もう一度検証しないといけないということだと思います。その中には地域が持っている災害に対しての備えみたいなものがひょっとしてあるのではないだろうか。そういう知恵があるのではないだろうかということが、まず1つ考えられることだと思います。

まさに今上町台地上では、昨今報道で上町断層のことが多く取り上げられておりますし、あるいは東海・東南海地震でございますとか、防災についての危機意識というものが非常に高まっている昨今でございます。その中で我々の活動としましては、少し災害について考えていきましょうというような取り組みを去年から少しスタートさせていただきます。防災の役に立つのかどうかというのはまだ少し先の話になりますが、災害に対してどう備えをするのか。あるいは災害とは何なのかというところから少し勉強しているというのが、今の実情でございます。

それからもう1つ地上げの問題は、すごく困っている問題です。やはり地域の人から言われるのは、ある日突然現金を持って、これは比較的大げさな表現だと思いますが、現金を積まれて、「『これでどうですかと、松富さん』と言われるんですよ」と言われるわけです。「そんなものを目にしたら、やっぱり心動くよ」と言われるわけです。

それは大きな問題でして、路地の中の密集の更新をどう考えていくのかということと、その地上げの問題は僕はある意味セットだと思うんです。この2、3年、地域のことを非常によく知っている僕たちでさえ、昨日まであった長屋がもう今日なくなっている。明日マンションが建つというような、そんな具合なわけです。ですからそれは、地上げの問題と路地の魅力や路地の更新をどうしていくのかということとセットだと思うんです。

1つ僕の考えを申し上げますと、例えば建物についての魅力をもっと上げていくということで付加価値を生んでいくことで、地上げの問題がなくなったりする可能性はあるかもしれないというような仮説。あるいは古い家屋を高橋先生がおっしゃられたように、市民ファンドをつかって、建物を整備し住み替えを促進させていくというような手だてがもしできたとするならば、そういう地上げの問題、あるいは路地の魅力にもっていくことにつながっていくのではないかと、こういうふうに考えております。

実は去年から空堀地域の中で調査をしております、120世帯の路地の中の、研究者の方から直接お話を聞きました。実はこれをステップにして次の問題にどうつなげていくかということをやりたいと思ってまして、お知らせになるのですが、来月3月15日の日に、空堀でその調査報告会と次なるステップをどう考えていくかということをやりたいと思います。もしご興味のある方がいらっしゃいましたら、ぜひご参加いただければとお願い申し上げます。

#### 川幡

最後の質問は、将来に向けて皆さんの考えを聞くことができる大変いい質問だったと思います。これをまとめということで最後にさせてもらいたいと思います。

今日の情報交換の場が、皆さんや私たちのこれからのまちづくりへのステップとかモチベーションにつながればいいなと思います。

そうしましたら少し時間が延びましたが、今日の講演会と交流会を終わりたいと思います。本日はどうもありがとうございました。お三人に拍手をお願いいたします。